

知的障害者のライフコース・アプローチ試論

—多声的質的調査から明らかになること—

平井 威

(明星大学教育学部)

KEY WORDS: 知的障害者 ライフコース 多声的質的調査 当事者主体 社会構成

I 目的

ライフコース・アプローチにもとづき、成人知的障害者の乳幼児期から現在までの療育、教育、福祉、労働、生涯学習などの経歴をたどり、それぞれの時期における当事者と家族の様子や支援成果を分析することで、知的障害者の豊かな人生のために必要な生涯発達と学習の支援はどうあるべきかを明らかにする。しかし「経歴をたどり」といっても研究者自身が「その時点に立って調査する」ことはできない。そこで収集したデータは、当事者・家族・支援者らの「語り」と「記録」である。この「語り」と「記録」を量的数値化せず使用する遡及縦断的・質的研究に何ができるかと自問自答する研究方法試論である。

II 方法

1. 2014年7月より2017年年3月までの間に、20代から50代までの知的障害者男女16人の本人並びに関係者に対するインタビュー及び実地見聞・資料調査を行った。インタビュー調査及び実地見聞・資料調査にあたっては、対象者に研究倫理規定に基づく誓約書を配布・説明し、個々に研究協力承諾書を求めたり資料収集覚書を交わしたりして実施した。

2. 質的調査、ライフコース、インタビュー、エスノグラフィなど（以下、「質的研究等」で表現する）に関連する文献研究等を通じて、1.の調査過程を検討した。

*本研究は、日本学術振興会科学研究費助成「ライフコース・アプローチによる知的障害者の生涯発達支援に関する縦断的・質的研究」(MEXT/JSPS KAKENHI Grant Number 26590263)の一環である。

*本研究は、明星大学学長による研究倫理審査の承認(平成27年12月18日受付番号H27-011)を得ている。

III 結果

1. 近年、質的研究等に関する興味深い成果物が散見されるようになったが、依然としてその研究方法は混沌としている。その中で、G.H.Elder, Jr. & J.Z.Gieleによるライフコースを決める4要素説(図1)ⁱⁱを採用し演繹的分析とした。

3. 知的障害者の「語り」を対象とした研究であること、当事者だけでなく家族や支援者など複数の「語り」を併用したこと、さらに幼少期・学齢期の「記録」を参照して「成育史」を描き出した先行研究はない。

知的障害者による「語り」と家族・支援者の「語り」には情報量の差があったが大きな記憶の食い違いはなかった。しかし両者の間と「語り」と「記録」との間には「意味付け」や「受け止め方」の違いが見られた。

4. 当事者主体のケア論やナラティブ・セラピーⁱⁱⁱからヒントを得た社会構成的アプローチで「語り」「記録」から「成育史」を描き出した。

インタビューをする中で、聞き取る行為そのものが当事者の「語り」に影響を与えてしまうという懸念をもった。特に周囲の期待に合わせて言動を調整する生き方を学んできた軽度知的障害者にとって多少の関係性をもった研究者が関わることは、それだけでライフコースの一部に波紋を起してしまうことも予想できた。ある対象者の家族は「うちの子はわかったようなフリをして周囲と合わせるものが特技」と述べた。聞き手と話し手の共同作業としてのライフヒストリーという視点も念頭に「成育史」を描くことにした。さらに「わかったようなフリ」が生み出す当事者のあり様も他の要因に応じて多様な意味をもつ。3. 4. から本研究を「他声的質的調査」と名付けた。

5. 得られた「成育史」分析の可能性と限界を踏まえた研究となった。

ライフコース・アプローチは、コーホートサンプルの数が多ければ量的調査としても有効な方法である。今後の大規模調査に示唆を与えられれば幸いである。

IV 考察

知的障害者の「語り」は司法の場では証言能力が問われることがある。学術研究の場ではどうだろうか? 「わかったようなフリをして周囲と合わせる」生き方は悪いことなのか良いことなのか、本人たちの「今」と直面したトラブルから考える。

V 脚注・文献等

ⁱ 秋風千穂(2013)軽度障害の社会学,ハーベスト社(江原由美子,木下 康仁,山崎 敬一編集による質的社会研究シリーズ第6巻)・大塚類,遠藤野ゆり(2014)エピソード教育臨床,創元社・六車由美(2015),介護民俗学へようこそ!「すまいるほーむ」の物語,新潮社・磯野 真穂(2015)なぜふつうに食べられないのか:拒食と過食の文化人類学,春秋社・上間陽子(2016),裸足で逃げる:沖縄の夜の街の少女たち,(太田出版)・平井威(2016),プ〜ケを手わたす:知的障害者の恋愛/結婚/子育て,学術研究出版など

ⁱⁱ G.H.Elder, Jr. & J.Z.Giele 他編著本田時雄他監訳(2014),ライフコース研究の技法,明石書店)

ⁱⁱⁱ 上野千鶴子 中西正司(2008)ニーズ中心の福祉社会へ～当事者主権の次世代福祉戦略,医学書院・2010年、遠見書房が「N:ナラティブとケア」という年1回発行の雑誌を刊行・斎藤環(2015),オープンダイアログとは何か,医学書院など (HIRAI Takeshi)

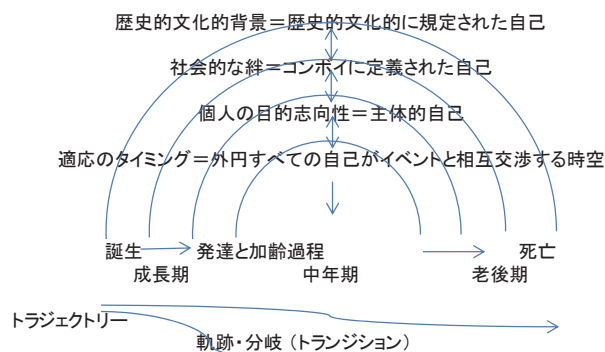


図1 ライフコースを決める4要素(文献ii 26pの図をもとに筆者加筆)

2. 採用した事例は資料収集や倫理的問題などから16名中5名に絞り込んだ。なお氏名等個人情報を一切秘匿し、当事者及び家族関係者が特定できないよう配慮した。